

SHINGON HORONIC

色

IRO

は

WA

匂

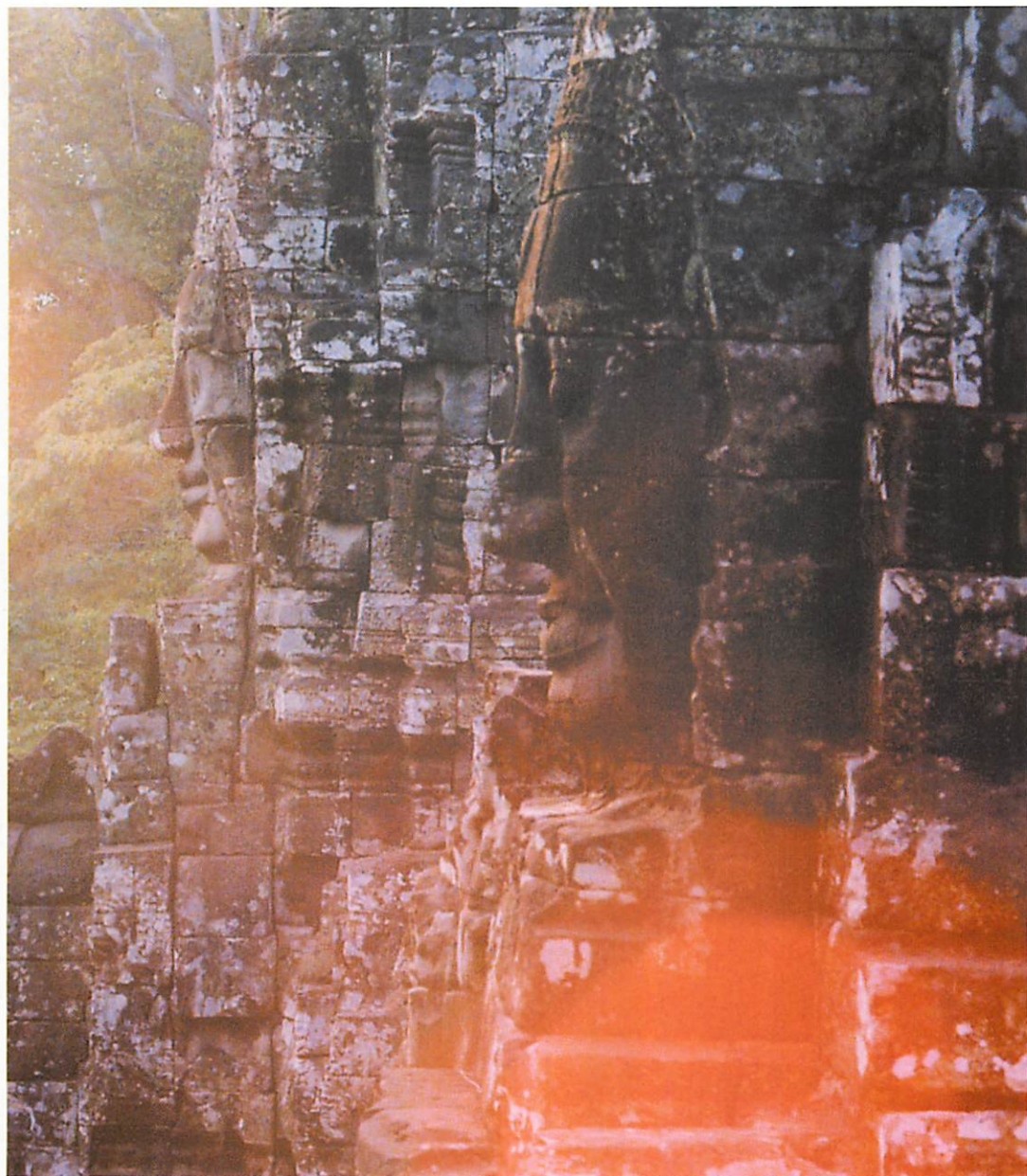
NIO

へ

E

ど

DO



特集 アンコールワットの魅力

平成十六年正月元旦発行 卷二十九



りんげんあせ
綸言汗のごとし

一たび発せられた言葉は
体から出た汗のごとく
川を流れる水のごとく
けして戻ることはない

どんな小さな糸のような一言でも
やがて組み紐の綸のような
重みと大きさを持つ

立場がうえの者ほど
その者の発する言葉は
重く大きく影響も深く

取り返すことも取り消すことも出来ない



現代の道しるべ 贅沢は素敵

11



特集アンコールワットの魅力3



ジャータカ物語 天下一の王子 13

お釈迦さま真理の花束



17



15

特集 アンコールワットの魅力

真如親王と真鑑カンボジア

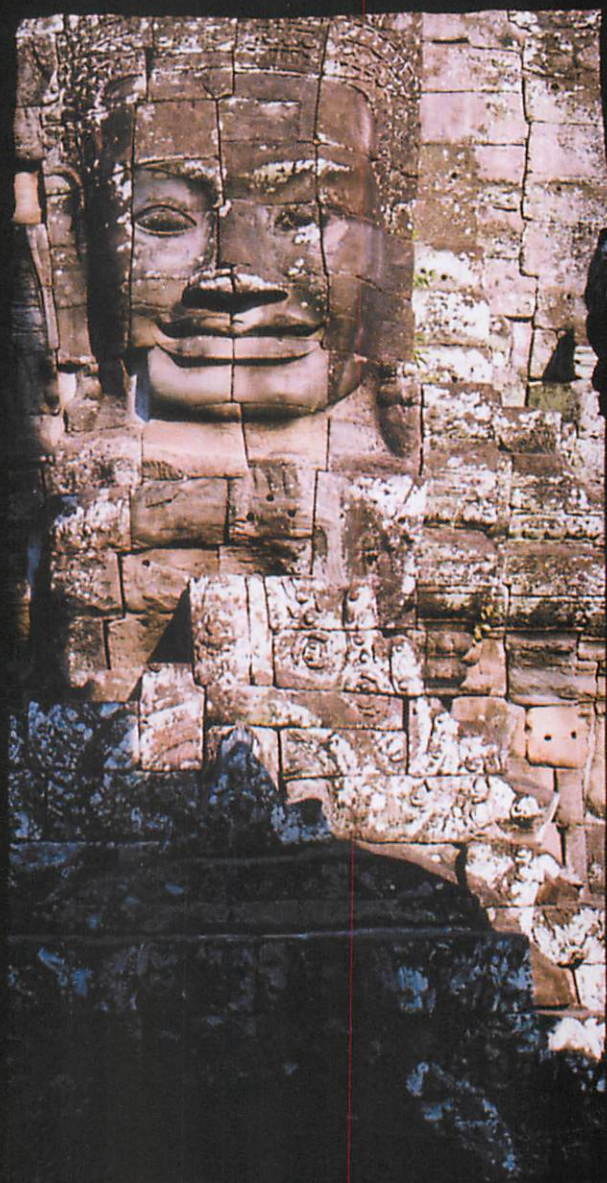
弘法大師の直弟子に真如親王という方がおられました。平城天皇の皇子であり嵯峨天皇即位に際して皇太子に立てられました。しかし「薬子の乱」という事件によって皇太子を廃せられた、これを一つの縁として空海の直弟子となり東寺に住まわれました。

やがて今は業平寺（なりひらでら）として知られる不退寺を建立されました。伊勢物語で名高い在原業平（ありわらのなりひら）は真如親王の甥にあたります。また斉衡二年（八五五年）大地震で頭部が落ちた東大寺の大仏さまの修理のため修理東大寺大仏司検校に任ぜられ六年後の貞観三年（八六一年）見事に修理完成され大法要が開かれました。すでにこの時六九歳と云われています。

翌年、真如親王はかねてから念願だった天竺への旅を決行されました。当時からカンボジアは真鑑と呼ばれ、インドシナ半島全体を支配下に置こうという王国でした。その都アンコールは中国からインドへおもむく海のシルクロードの要衝でした。

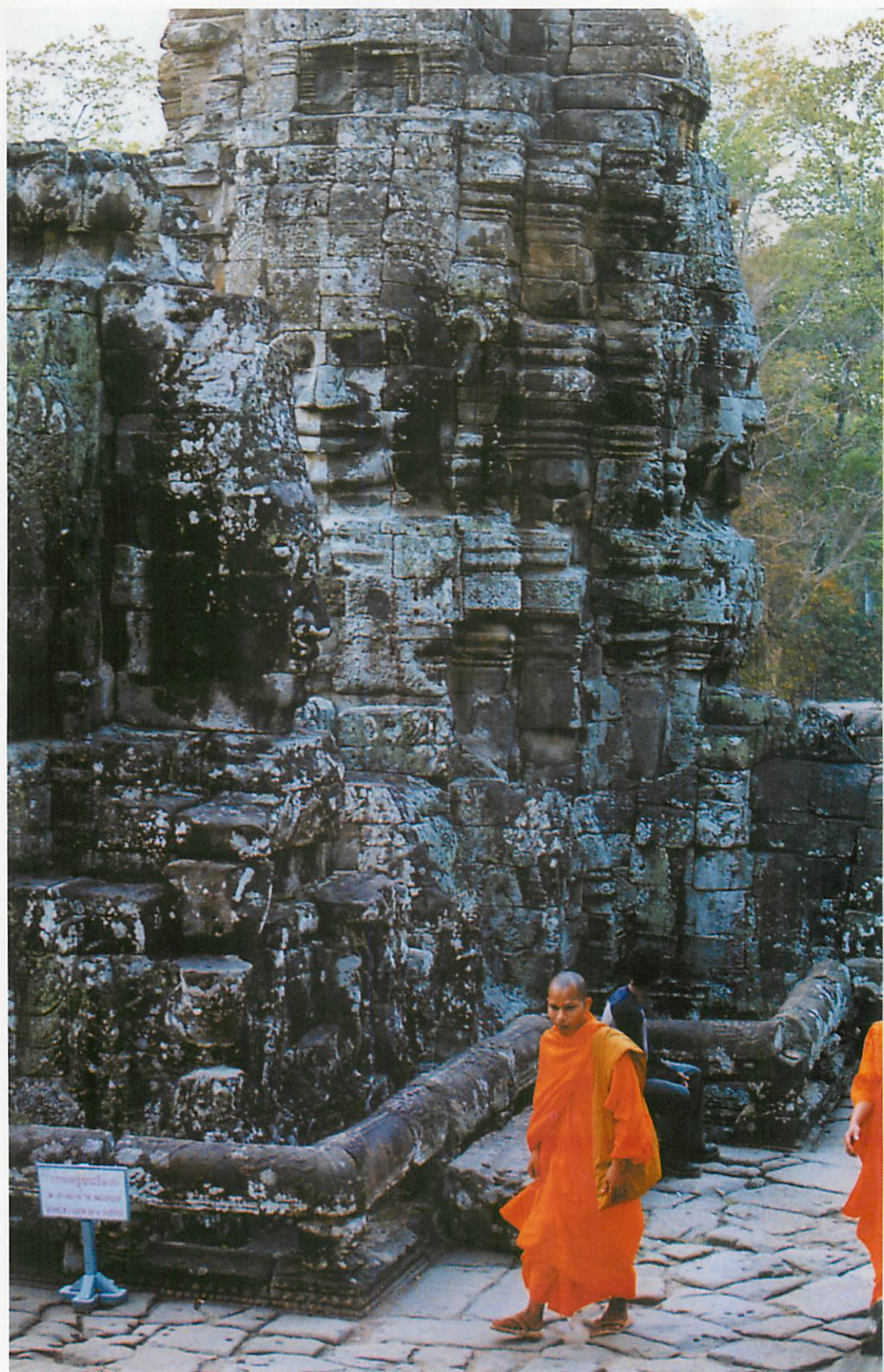
日本が奈良時代から平安時代にかけて仏教文化が大きく花開いたように、カンボジアは同じ頃にアンコール王朝が隆盛し、その最後を飾る頃に壮大な石造りの巨大寺院を完成させていきました。真如親王がアンコールへ赴いたかは謎ですが近くまで来ていたことは明らかです。





アンコール遺跡の中でも最も完成度が高く美しいバイヨン

塔の四面に彫られた観世音菩薩像が今も輝く





観世音菩薩の尊顔が四面に彫られた塔がいくつも立ち並ぶ立体曼荼羅

失われた王城アンコール

アンコールが世界の国に再発見されてからそれほど年月は経っていません。しかし私が子供のころからアンコールワットの名前は良く知っていました。永く忘れられていた仏教王国がある日忽然と密林から姿を現し、その完成度の高さとスケールの大きさに世界中が驚いたということ。さらにアンコール・ワットの奥にあるアンコール・トムはアンコール・ワット以上にスケールが大きくて素晴らしいということも子供の時から知っていました。多分祖父から聞いた話が心に残っていたのでしょう。祖父は全日本仏教連盟を組織し初代理事長としてアジアの仏教諸国を歴訪しました。きつとその土産話の一つにアンコールワットの話が出たのでしょう。祖父がアンコールワットに行ったわけではなくカンボジアの隣国タイ訪問中にアンコールワットの話が出たのだと思います。「カンボジアに壮大華麗な仏教遺跡がある」と。

アンコール王朝は浮沈はあっても長く栄え十二世紀にはその文化が大きく花開きアンコールトムを完成させました。しかしインドシナ半島最強だった国も、隣国のシャムが力をつけついにはアンコールを滅ぼし、その都は捨て去られました。それでも地元の人々は仏教の聖地として祈り、また日本からも十七世紀には巡礼に訪れた人がいます。江戸幕府が始まった当初は日本人の海外往来は自由で活発でした。

沢山の仏菩薩が並ぶ回廊

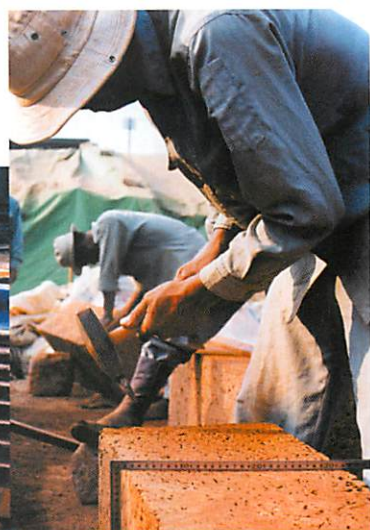
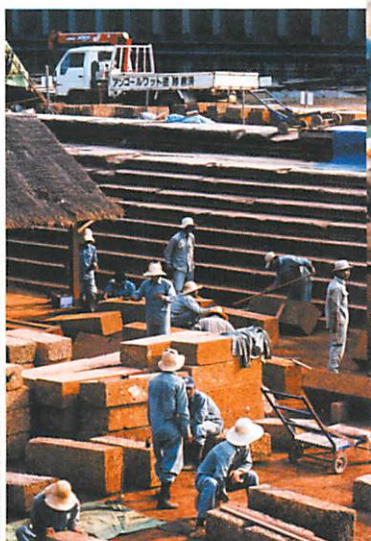


森本右近太夫等の墨書

タイのアユタヤには七千人の日本人が住む町があり、山田長政の活躍は今でも現地で有名です。カンボジアにも今のプノンペンとアンコール近くのピンヤールに日本人町があり、四百人前後の日本人がいました。アンコールワットの中央にプリア・ポアン（千体仏）という多くの仏像が祀られる場所があり、ここに四体の仏像を奉納した日本人森本右近太夫やこの地を訪れた日本人の墨書が今も残っています。当時アンコールを訪れた日本人達は、これが『平家物語』で名高い祇園精舎だと思いこんでいたようです。インドシナ半島は当時南天竺と呼ばれていて、仏教の聖地としての評価が高く朱印船貿易などでわたってくる日本人がこの壮大華麗な日本にはない石像の巨大建築群を見て釈尊説法の聖地と考えてしまっているのによくわかります。



向かって左は修復前の部分
右が修復後の石橋。



ノミを巧みに操るカンボジ
アの青年達

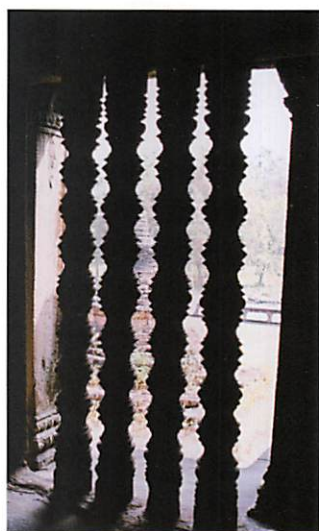
日本の支援による石橋の修復現場。この石の橋はどんなに雨が降っても水が路面に浮かばない
極めて浸透性の高い作りがされている。

その美しい石の建造物もレリーフの数々も永い間放置されたことと内戦によってずいぶん傷んでいましたが、世界の国々の技術援助によって修復が進められています。とくに日本の石工の棟梁により技術指導で、カンボジアの青年達が日本のノミを持ち石を加工している姿は感動的です。こうした技術や文化を通じた日本とアジアの人々との国際交流が盛んになると素晴らしい世界が見えてきます。

日本だけでは無く他のアジアの国にもない壮大で完成度の高い石の建築群をみれば誰でも驚きを隠せません。この地を最初に訪れた西欧の宣教師達は、この遺跡の建造者をアレキサンダー大王と考えたり、失われた文明アトランティスという説さえありました。とくにバイヨンの建物四面に観世音菩薩像のお顔を彫刻した立体曼荼羅は圧巻です。



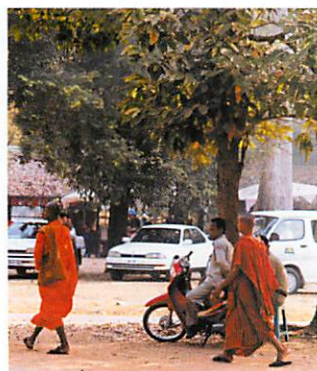
アンコールは水利都市で広大な人工湖を作り肥沃な大地を生み出していった。今再び緑豊かな大地から美味しい米が二毛作で生産されている。



ガシュマルの木に覆われたタブロム

美しいレリーフが随所に見られる

強い日差しを和らかな光にする連子窓



弓の名人

絵 美薫

美術指導

小原洋子先生



むかしむかし菩薩はベナレス王国の王子として生まれました。王子は子供の時から聡明で心優しく人々に慕われていました。武芸にも優れていてとくに弓では誰よりも遠くに正確に矢を放つので「天下一の王子」といわれていました。

王様が亡くなると人々は「天下一の王子」が王様になると思っていました。しかし「天下一の王子」は王様にはならず兄が王位につきました。兄王に悪い臣下が云いました。「天下一の王子」が王様の生命をねらっています。先に殺してしましましょう。」その話を「天下一の王子」は聞き自ら遠くの国へ旅に出ました。

ある王国で弓矢使いを捜しているというので行ってみました。「天下一の王子」は「私はあのマンゴの実の枝を打ち抜きましょう。矢が上がるときに枝の半分を射抜き、矢が空から落ちてくるときに残った半分の枝を射抜いてマンゴを落とすことも出来ます。」

「天下一の王子」が矢を放つと矢は見事にマンゴの枝の半分を射抜いて天の神々の世界まで飛んでいきました。すると「天下一の王子」はもう一本の矢を放ちました。二本目の矢が一本目の矢に当たり、一本目の矢は向きを変えました。二本目の矢は天の神々が受け取りました。



一本目の矢は雷鳴のような凄い音とともに落ちてきました。矢は見事に枝の残り半分を射抜いてマンゴの実を落としました。人々は拍手喝采して「天下一の王子」を讃えました。

そのころベナレス王国の周りの国は「天下一の王子」がいなくなったことを知り、ベナレス王国を攻める相談をして軍隊を国境まで進めていました。「天下一の王子」に兄王が助けを求める使者を送りました。

「天下一の王子はすぐにベナレス王国に戻ると、矢に『「天下一の王子」参上見参』と書いて手紙を着けて大空に向かって放ちました。

矢はそれこそ山をも揺るがするような雷鳴とともに隣国の王達が相談しているテーブルの真ん中に落ちました。矢の凄まじい勢いでテーブルは焦げて煙が上がりました。

矢に着けられた手紙を見て、隣国の王達はすぐに軍隊を引き上げ、それぞれの国へ帰っていききました。

「天下一の王子」はベナレスに平和が戻ったことを知るとまた遠くへ旅立っていききました。

ジャータカ物語はお釈迦様の前世の物語です。お釈迦様の前世は猿の王や金の白鳥やときにはかわいいうサギなど様々な生き物でした。そして多くの善行と徳を積み重ねたのでやがてお釈迦様となりました。ジャータカ物語には日本の童話やイソップ物語のもとになるお話も多くあります。親が子供に読み聞かせるのにも最適です。

白井 木でも石でも紙のようにスライスして物を使えば贅沢という人もないだろう。今はプリント合板があれば印刷したビニール皮膜を貼った大理石の立派なカタログもできている。そしていつのまにかそういうものにならされてしまった眼には、この建物の天井板一枚とってもこれは贅沢の塊と映るほかないだろう。もしわたしたちの仕事からそういう贅沢を探しだそうとすればいくらでもでてくるだろう。厚板は薄板より贅沢、花崗石はコンクリートブロックより贅沢、ブロンズはアルミより贅沢。まさかそういう価値観が社会生活の倫理基準からでてくるものとは思わない。ここは贅沢論や価値観研究の場ではないから、何が贅沢で、これなら創造の倫理に適った理性的な物質、だというようなことを仔細に語り論ずることもあるまい。だいいちそういう粗末な価値観からでてくる贅沢論の方向は文化も美も贅沢、自然も宗教も贅沢、とどのつまり生命又贅沢迄発展するしかないからだ。

さて松井選手の活躍にわいた大リーグ野球でしか見ていないとほとんどの球場が天然芝でとても贅沢で素敵な球場が多く、守備の選手も思いきったファインプレーが沢山見られます。松井選手の活躍の陰になりましたが野茂投手の活躍は素晴らしく野茂選手が道を開かなければイチロー選手や松井選手の活躍はなかったと思えます。かつて日本にいる頃、野茂投手もイチロー選手も変則なフォームと言うだけで一軍からはずされていましたが、二人とも名将柳木彬監督によって活躍の場を与えられ今日があります。もし二人とも柳木監督に出会えなければ二人の才能は殺され、ひいては松井選手の今の活躍も見られなかったと思えます。柳木監督は若い選手を色眼鏡で見ず、選手の個性も最大限に尊重しまかせていました。韓国は数年で経済危機を乗り越え、上海をはじめアジアに興隆する経済都市を引っ張るのは三十代四十代の人たちです。共産主義の中国でさえこの年代が活躍します。世界の激しい変化の波にはこの年代でなくては対応が出来ないのでしょうか。この年代が活躍できる国家や組織は活力もあり発展もします。日本の閣僚の平均年齢や銀行など金融界の役員年齢はまだまだ高すぎます。能力のある者がその能力を発揮できないほど不幸な事はありません。柳木監督のごとく最大限任せられる若者がいて、任せてみるのも贅沢で素敵な事です。そして会社や仕事をリタイアした高齢者がこれから団塊の世代が高齢化するに従い増えていきます。その高齢者こそ日本の失われた地域社会の再生の切り札だと思います。祭りや地域の美化（花を植えたり育てたり）と防犯（公園のパトロールや不審者、不審車両の通報）そして子供達の寺子屋のような教育（習字、華道、茶道そしてスポーツ）や躰にもこの年代の活躍は欠かせません。世代間の交流が進むことは必ず地域に大きな恩恵をもたらしますし、各世代の人々にも得るものは計り知れない大きなものがあります。老人にも子供達にもそして若者にも。

若者とはもう云えなくなった中村勘九郎が平成中村座を今年もかけました。今年は浅草の浅草寺の境内です。江戸開府四百年を記念して境内には江戸の芝居小屋町並みの雰囲気再現され芝居を楽しむ雰囲気がとても良くできていました。一ヶ月だけの公演のためだけに小屋をかけることも、とても贅沢で素敵でしたし、勘九郎の粋な心意気に今後も期待します。この秋には多くの素晴らしい公演が目白押しで日本にいながら世界の至芸に出会えることもとても贅沢で素敵です。D・バレンボイム指揮のシカゴ交響楽団の演奏でシルヴィ・ギエムがボレロを踊り圧巻でした。鬼才ベジャールが彼女の為に振り付けたというこのボレロを、当時彼女は体力が無く踊れなかったと云われます。そのボレロをジョルジュ・ドンが踊り、頂点を極めました。その後、S・ギエムも踊るようになりましたが今や円熟の境地です。ホセ・カレーラスも難病白血病を骨髄移植によって克服してカンボジアでのコンサートや日本でも元気な姿を見せています。彼の深みのある暖かな声は多くの人々を勇気づけています。（日本骨髄バンク0120-445-445）

総選挙も終わりましたが自公保の政権政党が「鬼と犬」どちらを描くかが日本の岐路となります。しかし先ず民間企業並に議員と官僚のリストラすることが日本再生の第一歩です。

現代の道しるべ 菩薩の道 鬼と犬

贅沢は素敵！

読者の方から「『色は匂へど』は贅沢な雑誌ですね。海外にまで取材に行つて。飛行機はファーストクラスですか？」と言われました。確かにこの『色は匂へど』はとても贅沢な作りをしています。冊子にもかかわらず、紙や印刷にもかなり細かい注文をつけて、全項カラーで組んであります。ですから印刷費用は安いとはいえません。しかし取材費はほとんどゼロです。一昨年のスペイン特集、昨年のイルカの特集はハワイとグアムで取材していますし、今回のアンコールワットはカンボジアと海外まで足をのばすことも多くなりました。しかしその旅行は全額自費で行きますので、飛行機ももちろんエコノミーのバックツアアです。インタビューもほとんど知り合いか、知り合いの知り合いといった感じで話を聞いて、内容が『色は匂へど』の特集にあえば使います。インタビューのすべてが使えるというわけではなく、逆に使えないものの方が多くその原因も様々です。話が専門的すぎたり、正しく伝えるためには紙面が足りなかったりと。もちろん使えなくてもお礼をすることも有れば食事を差し上げることもあります。そうした積み重ねがまた良き縁を広げていきます。

去年は小津安二郎監督の生誕百年の記念年でした。松竹から小津作品のDVD特集が発売されました。あらためて見ても画面の美しさ映画全体に貫く品のよさは他の追随をゆるさないでしょう。セットの中での撮影が多くありますが、そのセットの寸法間取りすべて建築に詳しい小津監督本人がかなりの図面を書いています。さらに使われる小道具や絵、役者の着る着物や洋服まで監督の見立てです。芸術品は赤坂の『貴多川』のご主人の北川靖記氏が監督の心にかなうものを大船まで運んで撮影に使っていますし、和服は浦野里一氏、絵は岡村多聞堂、洋服は銀座壱番館です。本物と一流品を贅沢に使いさりげなく画面に納めるところが小津映画の贅沢で素敵なところですよ。



ところで今の日本は『筒に活けたる牡丹の水を上げかねる風情かな』（壇ノ浦兜軍記録の阿古屋から）といった状態だと先日京都と一緒に食事をしたアレックス・カーは言います。

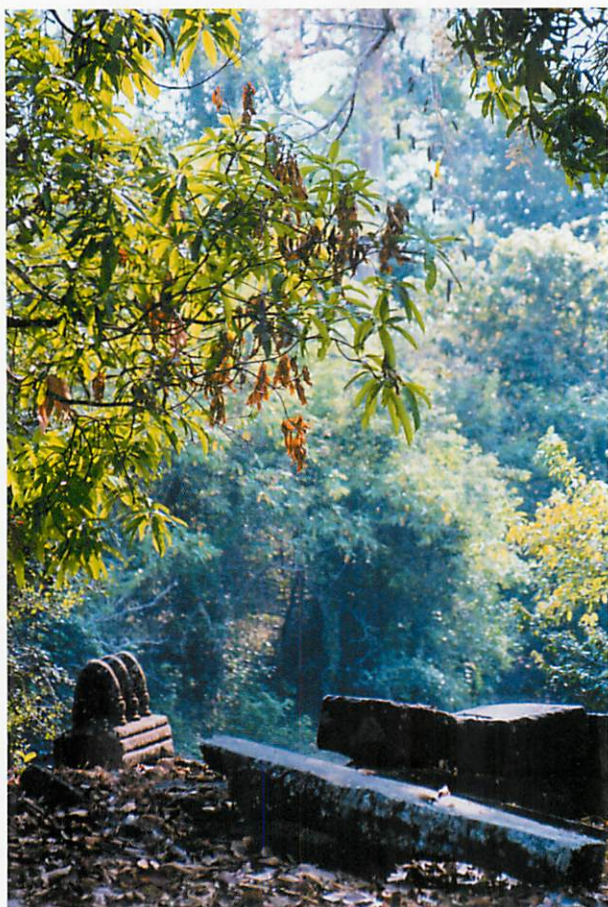
博物館を建て美術館をつくったらそれでおしまい。その建物を活かし利用する活用が全くな



い、それは実は鬼の仕業だと。犬のように身近で子供でも知っているものは描くことは難しいが、鬼のように架空のものはどんなに大げさに描いても間違いとはいへません。そして身近な犬を描くより鬼を描いた方が派手で分かりやすい。しかし為政者は身近な犬のような存在には目を向けません。目に見える箱物、それもあるべく予算を使い大きく派手な物を作れば自分の功績が後世に残るという矮小な功名心が鬼子の箱物を産み続けます。県庁舎、都庁、美術館、博物館、図書館ついには能楽堂も各地に増え始めました。能を舞える能楽師がごく限られているのにもかかわらず。かつて「昭和の三大バカ査定」と呼ばれた誰もが無駄無理無用と思いながら誰も止めない公共事業がありましたが、今では大バカ査定陰で日本中にバカ事業が蔓延しています。勤労者の積み立てた失業保険金をふんだんに利用しかつ毎年億単位で赤字を垂れ流す「わたしのしごと館」はその一例ですね。ドイツでは二年間支給される失業保険が日本ではたった六ヶ月分です。無駄で無意味な事業に回すほど余っている積立金は速やかに失業者に一日分でも多く支給すべきです。公共事業にも贅沢で素敵な物もあります。静岡市立の石水館があります。孤高の建築家で妥協を許さない白井晟一氏の作品です。ふんだんにムクの材料を使い大理石を思う存分に使っています。以下は石水館の紹介の白井晟一氏の対談の抜粋です。

問い あれだけムクの木を使うと、それだけでももう贅沢だと考えてしまうところがありますね。あの天井を見て豪華だとかいう風な単純な見解で終わってしまうところがあるように思いますが。

お釈迦様真理の花束



Irrigators lead the waters;
Fletchers fashion the shafts;
Carpenters bend the wood;
The wise control themselves .
As a solid rock is not shaken by the wind;
Even so the wise are not ruffled by praise or blame.

毀	智	風	譬	智	材	水	弓
譽	者	不	如	者	匠	人	工
不	意	能	厚	調	調	調	調
傾	重	移	石	己	木	船	角



弓工は弓を調え
 水人は船を調え
 大工は木を調え
 智者は己を調える
 盤石は
 風に揺らぐこと無し
 かくのごとく
 心ある智者は
 誉れと
 そしりの中にも
 心ゆらぐことなし

CDの紹介



『ホイール・オブ・ライフ』

渡辺貞夫



『人生はめぐる輪のように』
(角川文庫)

このCDの題名はE.キューブラー・ロスの同じタイトルの本からつけられました。ロス女史は末期ガンの患者等のインタビューを通じて死に臨む人々の苦悩や葛藤そして覚悟を詳細にレポートしつつに臨死体験という輪廻の世界を垣間見せることになります。西洋では輪廻転生は受け入れられません。また人を救うべき病院で死に逝く患者のインタビューを行い、その内容を学会へ発表したり講演することには、当時の医学界からは大きな反発がありました。このことなどでロスは全米の病院から閉め出され患者達へのインタビューも出来なくなり講演会もボイコットでガラガラという状態に追い込まれます。その一方で彼女のレポートを読んだ全国の末期ガンなどの患者やその家族が勇気づけられていました。病院は病気を治すことが目的で最善を尽くしていきます。死はその最善策の最悪の結果ですから病院は死に眼をむけません。しかし末期の患者達は治療中も常に死と向き合っているのをえまません。どうしたら自分の死を受容できるのか。ロス女史の多くの症例をまとめたレポートが末期の患者達の心を救っていたのです。ロス女史のレポートで救われた末期の患者とその家族達は感謝の手紙をロス女史に送りました。こうしたことがマスコミで紹介されやがて講演の依頼が病院からも来るようになりました。

ロス女史の自伝『人生はめぐる輪のように』（角川文庫）に感銘を受けられたナベサダさんが創られた今回のCDはまさに珠玉の一遍。CDを紹介すると「ジャンルはなんですか？」と質問されます。もちろんこのCDはジャンルで言えばジャズ。しかしナベサダの音楽はもうジャンルを超越しています。『音楽』が好きな人はだれもが楽しめます。『音』が大地から大空へ、大海から宇宙の星座に響き、またその音が地球に降り注ぐ。流星のように『音楽』が光のシャワーとなって還ってくる。まさに『ホイール・オブ・ライフ』アルトサックスはもちろんフルートもソプラニーノも絶品。

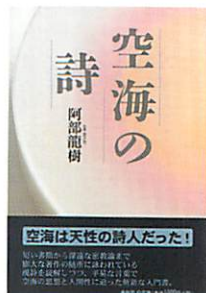
実はある少人数の会でナベサダさんがタイトル曲の『ホイール・オブ・ライフ』をソロで演奏されました。CDでは他の楽器をバックにナベサダさんがフルートを吹いていますが、この会の時はアルトサックスでの独奏でした。その音の深さ暖かさに思わず涙する人も多かった演奏でした。



『空海 言葉の輝き』
竹内信夫 ピエブックス



『空海の歩いた道』
頼富本宏 小学館



『空海の詩』
阿部龍樹 春秋社

書き初めには空海のことを！！

最近再び空海ブームで書店には空海関係の本が並び、ある書店では『空海コーナー』まで設けてありました。

おかげさまで一昨年春秋社より『空海の詩』を出版しましたが、この本をきっかけに空海の言葉を再発見したという声も沢山いただきました。そうした中で空海の言葉を紹介する好著が書店に並びます。竹内氏の『空海 言葉の輝き』は前号でも紹介しました。『空海の歩いた道』は現代の我々の心の糧になる空海の素晴らしい言葉を永坂氏の写真とともに紹介されています。ぜひ書き初めにされると善き一年が始まると思います。



新刊の紹介

『死に方を忘れた日本人』 碑文谷創 大東出版社

戦後の日本にはタブーが二つあります。『宗教』について語ることと『死』について語ることです。日本人が学ぶ義務教育の中でこの二つの人として最も大切な問題に眼を向けず経済だけを追いかけていた結果が今の日本です。その『死』を葬送や墓地の問題さらに遺体論等までジャーナリストの視点から明らかにしていきます。



『日本人の忘れもの』 中西 進 ウェッジ

前号で紹介した山崎武也氏の『気品の研究』は好評でした。この『日本人の忘れもの』には二十一個の忘れ物が紹介されています。

『はなやぐ、けはい、かみさま、むすび、いのち、ささげる、おそれ、たたみ、にわ』などについて語られ日本人が育んできた善きものを再発見できます。



『「一流」であり続けるために。』 小松成美 新潮社

一流つまり何かの世界のトップに到達する事も大変ですが、その位置に居続けることはさらに凄いことだと思います。漠然と眺めていた野球のイチロー選手やサッカーの中田選手の考え方や本音が描かれています。そしてそこには「一流であり続ける」彼らの共通点も見えてきます。今年メジャーで活躍した松井秀樹選手の渡米前のインタビューも掲載。



次号特集 甲山 神呪寺
美しき人とお大師さま

Editor ABE RYUJU Art Director and Photographer/TATSUKI Editorial Staff/ SAMURO MIWA TOKUMARU KOJI MOTOYAMA KAZUFUMI
OOYAMA CHIGUSA SHIMAZU RYUTOKU KAWASAKI YUKIKO KAWAMURA KAZUYA

Making Mechanic SHOEIDO Printing KORINKAKU

EDITORIAL OFFICE MANGANJI SHUGEISHUCHIIN S.H.C

〒158-0082 東京都世田谷区等々力3-15-1 電話 03-3705-1622 ファクシミリ 03-3703-4979

Shingon Horonic Irowanioedo 第一巻第二十九号 平成十六年正月元旦発行

2100